

学校がみんなぱくと 出会ったら

博学連携がようやく軌道にのりはじめています。どういわけか民博と学校はずっと近くて遠い仲だった。それが共同研究(国立民族学博物館を活用した異文化理解教育のプログラム開発)をすすめ、共同作業に取り組むなかで、新しい連携の形が生まれてきた。その成果は、授業くりこりに生かされ、児童・生徒の作品に結晶化されたのである。七月二十八日(木)〜九月五日(月)開催の企画展「学校がみんなぱくと出会ったら——博学連携の学びと子どもたちの作品展」に先がけ、そのエッセンスを小・中・高に分けて紹介する。

中牧 弘允

(なかまき ひろゆき) 民族文化研究部



博学連携の 学びをつくる

森茂 岳雄

(もりまたけお)

中央大学文学部教授
国立民族学博物館客員教授

二〇二〇年度からの新学習指導要領による「総合的学習の時間」と「完全学校週五日制」の実施によって、これまで学校教室に閉じこめられがちであった学びの場を「ひろげ」、「つなげ」ていくメディアとしての博物館の意義と可能性が認識され、全国で学校と博物館の連携がさまざまな形で進められてきている。このような教育改革のなかで、新しい学びのメディアとしての、また学びの素材を提供するデータ・バンクとしての国立民族学博物館の役割は大きくなってきた。

(モノ)やビデオテクは、知的好奇心と探究心を刺激し、自ら学ぶ意欲や主体的に問題を発見し解決する力の育成を促す異空間でもある。また、展示資料にさわりながら学習できる「もの広場」(機器の老朽化のため平成一七年一月より閉鎖中)は、異文化に対する実感をともなった認識を深める空間でもある。

接民博を訪れて活動できない学校・学級のために貸出用学習キット「みんなぱく」の開発と運用もおこなっている。本特集では、これまでの民博の教育活動のなかから学校との連携によるいくつかの授業実践例を紹介し、博学連携の学びの意義と可能性を示したい。今日、博物館は従来のように人びとを啓蒙するための知識を提供する「神殿」ではなく、学習、実験、討論、ワークショップの場、つまり「フォーラムとしての博物館」という考え方が主流になりつつある。本特集を通して民博との出会いの楽しさを実感して、新しい学びの創造の場として民博の可能性を再発見していただければ幸いである。みなさんも、ともに博学連携の学びをつくってみませんか。



民博ホームページ上の砂絵に見入る製作前の子どもたち



「みんなぱく・ブータンの学校生活」に入っていた弦楽器ダムニエンを手に劇をする

砂で描く一瞬

中山 京子 (なかもやまきょうこ)

京都ノートルダム女子大学専任講師
前東京学芸大学附属世田谷小学校教諭

先住民の「砂絵」をヒントに

子どもたちが真っ白な画用紙の上を息をひそめながら砂を落とす。その視線は指先と目の前の画用紙に集中している。何を描くのか、何が描かれるのか、その答えを知っているのは子どもたちの感性と指先である。

小学校の図画工作の教材に「砂絵」がある。この「砂絵」の製作活動に、民博の常設展示「展示ガイドブック」を活用し、先住民が描いた砂絵を取り上



「かたつむりくんと雨」



「クルリンピック」



民博ホームページから検索した砂絵を読み解く



指先に集中して砂をまく。子どもの感性が表出する



砂絵を消す一瞬。手先を見つめる表情が面白い

げることにより、学習活動がより豊かなものになるよう試みた。
人は身近なものをを用いて表現してきた。「砂絵」は、現代に受け継がれている継承文化のひとつである。オーストラリア中央砂漠地域では、足跡や痕跡をもとにしたシボリズムが発達し、儀礼の際、土地に根づく精霊の神話世界を表す砂絵が地面に描かれた。現代では、キャンバスにアクリル絵の具で描く芸術に変化している。常設展示場には、シンボリズムの解説とともに現代の作品が展示されている。また、ホームページから「砂絵」で検索できる所蔵作品もある。アメリカ先住民のナバホも砂絵を描いてきた。しかし、儀式のなかで地面に描かれた砂絵は消される。類似した文様が研究用に再現されたり、敷物などの文様として織り込まれたりすることはあっても、本物が写真に撮られることはない。儀礼が終わると素早く消し去ることは、チベット仏教の砂曼陀羅と共通する。
このような「砂絵」がもつ特徴にも

とついで、授業では、砂絵を「残さず消す」こと、従来の制作活動と同様に作品として「残す」こととの双方を取り入れた。作品が完成したその時の美しさや思い入れを、一瞬の芸術としてとらえる。これは音楽表現に似ている。録音記録としての音は物理的に残せるが、その空間に現れた瞬間の音そのものは消えゆく。砂を思うようにまき、描かれてくる絵とそこで対話する造形活動をじっくり味わうことができるのが砂絵という教材である。一方で、気に入ったものができれば作品として残したいという子どもの欲求も当然である。残すために、木工用ボンドやカッター固定用両面テープを使用して、砂絵の作品を固定した。
「自然」「生きる」をテーマに、画用紙にさらさらと砂をまき、完成した作品を見つめた後、名残惜しうに消す子ども。画用紙に木工用ボンドを落とし、その上から砂をまき、乾燥を待つ子ども。画用紙に両面テープを隙間なく貼り、その上から砂をまき、砂を固定していく子ども。どの子どももその眼差しは真剣である。

教室にきた「みんぱく」

居城 勝彦 (いしづかかつひこ)

東京学芸大学附属世田谷小学校教諭

留学生との交流

毎年二月になると、東京学芸大学で学んでいる留学生たちが学校にやってくる。昨年はイタリア出身の学生たち。そして、今年も来てくれた。それぞれ韓国、中国、香港、ドイツ出身だ。子どもたちは四つのグループに分かれ、それぞれの国について調べ、クラスとしての歓迎の仕方を考え始めた。インターネット、メディアルーム(図書室)の本、旅行会社のパンフレット、ガイドブックをあたった。



「みんぱく」を開けて、まず伝統衣装を着てみた。日本のものとは色使いや手触りが違うことに気づく子どもたち



芸能集団が使う帽子。本当は先端に紙テープをつけるのだが、教室ではスペースの関係上できなかった。あご紐で固定しても、とても重い。どうやったら、これを器用に回せるのだろうか?



伝統衣装を着てポスターセッション。ポスターには旅行用のパンフレットから切り抜いたものや、「みんぱく」のトピックシートからの説明も盛り込まれている



韓国のお札を使ってそこに描かれている歴史上の人物について説明。同じ漢字でも使い慣れない読み方なので苦戦中



韓国の小学生の持ち物スーツケースに合わせた「みんぱく・ソウルスタイル」

「みんぱく」を楽しむ子どもたち

ここで韓国グループは、民博が開発した学習キット「みんぱく・ソウルスタイル」に出会った。ドキドキしながら開けたスリッケースで、まずとびついたのは伝統衣装。ほかのグループの子どもたちも着始めた。そこから「みんぱく」のなか

に引き込まれていく子どもたち。文字や写真だけでなく実物が子どもたちに語りかけてくる。「これってなんだだろう」「こんな使い方をするのかな」をそのものを使って試してみる。トピックシートで確かめてみる、わかったことをグループの友だちに教える。そういった過程のなかで、子どもたちのもつ情報はどんどんと増えていった。ポスターにまとめるときも、「ここは実物を見ながら説明しよう」「衣装の着方を実演しよう」とアイデアがどんどん出てくる。

携帯用の箸セットは自分たちも使っているが、韓国では金属製のスプーンと箸が一緒に入った「スジヨセット」となる。ガイドブックなら隅々にあるような自分たちの生活との比較から、とても重要な情報となる。そのことを仲間に分らされる。そして聞いている人たちの反応が返ってくる。しかもそこで使っているのは、手にとつて確かめられる本物なのである。まさに、民族学博物館が教室にやってきたのだ。子どもたちは教室に居ながらにして、博物館を使い、仲間と学びを深めていった。

ポスターセッション終了後、クラス全員で「みんぱく」を楽しむ。これで日本にもあるよね」「ふとんが軽くてツルツルしている」「どうしてこんな重い帽子がクルクル回るの」「今度は違う衣装を着てみよう」……。子どもたちの学びあいは、まだまだ続く。

仮面をつくらう

学びを拓く協働作業

佐藤 優香 (さとう ゆうか)

国立歴史民俗博物館助手
前民博非常勤研究員

願いをこめた仮面をつくらう

二年前から始まった共同研究会「国立民族学博物館を活用した異文化理解教育プログラムの開発」では、小・中学校や高等学校の教師、博物館や大学に所属する研究者など、専門や立場の異なるメンバーで、博物館を活用した新しい学びについて議論を重ねている。この研究会の取り組みのひとつとして、筆者は同じく共同研究会のメンバーである茨木市立彦原小学校の八代健志教諭と授業づくりをおこなう機会を得た。同小学校で以前よりなされていた図工科の「仮面づくり」に、博物館見学を取り入れ、新しい授業として子どもたちに学んでもらおうというものである。民博に展示されている仮面を鑑賞し、さまざまな地域に暮らす人びとがそれぞれの意味をもった仮面をつくり、仮面を使っていることを感じてもらいたい、それらを踏まえた上で自分の仮面をつくらう

でも、思いをこめた仮面をつくらう

夏前から相談を重ねてきたこの授業は、「願いをこめた仮面をつくらう」と題され、秋の博物館見学からスタートした。展示場に入る前に、実物資料の仮面およそ一〇点を手にとってじっくり見ながら、それぞれが仮面がもつ意味を考えた。続いて展示場では、子どもたち一人ひとりが好きな仮面を選んでその仮面にはどのような意味があるのか、つくり手や使い手のことを知り、そこにこめられた願いを想像しながら鑑賞をおこなった。仮面を観ること仮面をつくることをつなぐためにも、展示されている仮面とこれからつくる自分の仮面をつなぐために、「つくり手や使い手を慮る」というプロセスを大切にしたいと考えた。博物館での鑑賞を経て、子どもたちは自分の願いは何かを考え、その願いをかなえるための仮面という、意味をもった作品づくりをおこなった。子どもたちから寄せられたコメントに「と



「運動神経抜群になれますように」という願いをこめてつくられた仮面

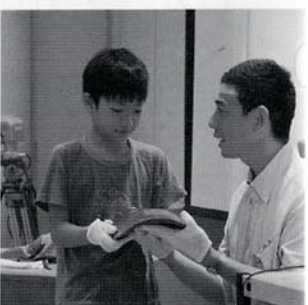
んなものでも気持ちを表せることがわかった」との感想があった。博物館が、観ることをつくることの意味を考えさせてくれる場になっていたのだ。また、仮面には願いがこもっているということがわかったということや、それぞれの願いは違うのだということが異口同音に記されていた。子どもたちは仮面の鑑賞と制作を通して、モノにはそれぞれに意味がこめられていることや、それらが多様であることを理解したのである。この視点は、これから彼らが異文化を理解していくうえでひとつの手がかりとなってくれるにちがいない。

学びを拓いていく楽しさと難しさ

この授業は、およそ一〇時間におよび、小学校中学年の図工科としてはかなり多くの時間を割いた取り組みとなった。子どもたちが費やした時間以上に、八代先生と筆者の打ち合わせにも多くの時間を要した。子どもたちの経験を少しでも豊かで実り多いものにしたいたい



展示場で仮面のスケッチをしながら、つくり手や使い方のことを想像してみる



手袋をはめてマレーシアの魔除けの仮面に触る。「思ったよりも重くて、不思議な柔らかさがあった」



新聞紙でつくった張り子の面に願いをこめながら色を塗る

一人ひとりの願いをこめて

八代 健志 (やしろ けんし)

大府彦原小学校教諭

お互いが「八〇度違う」ことに驚き

教師としては、博物館のもつ圧倒的な情報を、小学生にそのまま「高いところから低いところへ、水を流し込むように」無制限に与えてしまうと、子どもたちは溺れたようになって、何もできなくなってしまうのではないかと、という危惧を抱いていた。そうならないためには、「相手の文化を、自分の尺度だけで判断してしまう危険」を感じながらも、児童たちが自分なりに受け入れ、理解することができるように、情報を調整する必要があった。

一般に教師は、個々の児童を見ながら

らも、全体がどう動くのかを考えている。また、目標意識を非常に強くもち、そこへの到達については十分すぎるほどに自らに成否を問ひ、児童に対する態度が「ゴノゾノ、私ゴノゾノ、ナントカ指導シナキヤ」という責任感に凝り固まっているようなところがある。

それに対して、今回の実践で協働した博物館教育を専門とする佐藤優香氏は、児童を一人ひとりよく見て、個々の変化について深く追求してくれた。つまり、到達すべき点について語る前に、学びのプロセスは「一〇〇人れば一〇〇通りすべて違うものである」という前提に立ち、まず個々の学びのプロセスにお

いて楽しさや喜びなどをたっぷり味わえるように配慮された。また、すべての児童が同じゴールに到達することへのこだわりも低いように、私には感じられなかった。この違いは、所属する施設・機関や業務の目的等が違うのだから、当然といえは当然だった。しかし、授業実施前後の打ち合わせや、実際の授業場面で、あるいは児童の見方でも、お互いが「八〇度違う」ことに驚きながら進めていった。こうした実感・体験こそが両者にとって大きな財産となった。いかなる民族の文化に對しても平等に接し、互いに相違点を認め合ひ、共通点を探り合う努力が必要であるという「文化相対主義」は、異文化理解の態度として重要である。しかし、いわば「教育施設相対主義」も大切だったのだ。

ホシモノに出会えた成果

一緒に取り組んだ、四年生担任教師三名からの声を次に示す。「仮面に願いをこめたからこそ、作品に

あのような多様性が生まれた。」

「長い期間をかけたが、その間、児童の誰もが嫌がらず大変集中して取り組めた。自分なりの願いをこめたところにその大きな理由があると思う。」
「民博に行ってみて世界のさまざまな仮面を見て、ユニークな願いやデザインを自由に発想できた。」

「教室でおこなわれた学期末懇談のうちに、保護者が室内後方黒板にある我が子の作品を誇りと誇りと言いつつ、どこに描出したか、家で子どもがよく話していたからだった。」

「佐藤先生を子どもたちは心待ちにしていた。佐藤先生の「いいところ探し」はとてもやさしい気持ちにしてください。担任の私たちは、あんなふうにはかりはなれないなあ。」

これら学級担任の声は、民博に行つてホシモノに出会えたこと、また博物館と学校との立場の違いが、よい方向に児童に作用したことを示している。

博物館がもっているリソースを活用することで学びの可能性は大きく広がるが、そのためには博物館と学校がゆとりと時間をかけてプランを練ること、「学び」について語り合うことが必要になってくる。それは、博物館での活動と学校での活動をつなぐため、また博物館のモノと自分のコトをつなぐためには、「しかけ」が必要だからである。そして、博物館利用によって拡がりをみせた一人ひとりの学びを、学校のものづくりに活かしていくような柔軟性も大切な要素であるだろう。博物館は子どもたちにとって異文化との出会いの場だ。子どもたちの博物館経験が楽しいものとなることを願いながら、学校も博物館も協働している。それもまた、異文化理解のプロセスなのである

ミニ博物館をつくる

博物館を感性で学ぶ

今田 晃一 (いたこういち) 文教大学専任講師

発信側の模倣体験学習

平成一五年二月に学習指導要領の一部が改正となり、総則において「博物館等の社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携」を進めることが示された。学校教育のさまざまな場において、博学連携が期待されているのである。充実した連携のために、それぞれの学びのよさを生かした学習の場を創造していくことが大切である。

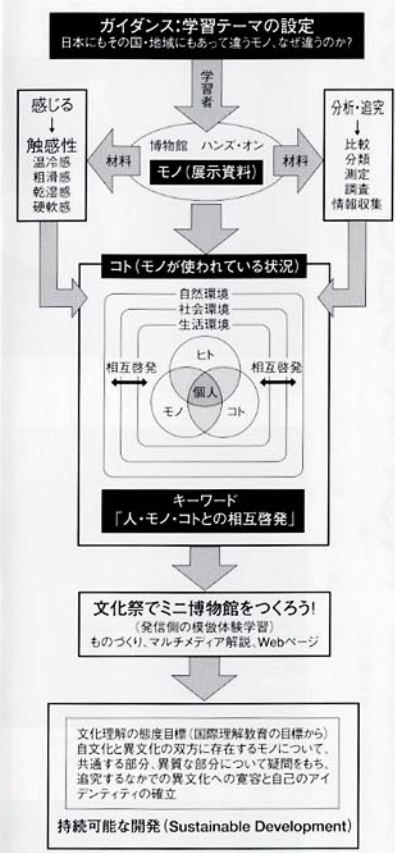
まずは学校側(教員および学習者)が博物館独自の学びについて正しく理解することが、博学連携にとって重要なある課題である。博物館に限らず、学習者が学校以外の情報メディアを理解するには、情報の発信者の立場を擬似的に体験することがもつとも有効である。たとえば、ニュース番組は何らかの意図をもって構成されたものであるというメディアリテラシーの概念(批判的思考力)を学ばせる

博物館独自の学び

には、実際にニュース番組をつくるという学習を通して、情報の発信者の立場を実感させるという発想である。筆者はこれらの授業を「発信側の模倣体験学習」と名づけ、さまざまな実践をおこなってきた。そこで博物館の学びを実感するために、学習者が博物館をくるといふ視点から学習プログラムを開発した。

学習プログラムの開発

これらの博物館を利用した教育においては、ハンズ・オン、つまり触れたり、体験できたりする参加型の展示方法をいかに活用するかが重要になってくる。国立民族学博物館のハンズ・オン「もの広場」は、国際理解につながるさまざまな国・地域のモノ(主に日用品)四〇種一〇〇点が自由に触れられる状態で展示されていた。それを見本とし、模倣する「発信側の模倣体験学習」の構想図を上にした。学習プログラムの開発と実践については次頁をご覧ください。



ハンズ・オン「もの広場」を活用した学習プログラム構想図

見せる側の苦勞を体験

木村 慶太 (きむらけいた) 奈良県香芝市立香芝中学校教諭

本物の資料を自分たちで

博物館学習においても、「発信側の模倣体験学習」は非常に有効であるという観点から、平成一六年一〇月一―九日、本校文化祭において「ミニ博物館」づくりを実践した。

展示資料は、国際理解につながるような諸外国の民芸品や生活用品を中心としたものとした。また生徒たちが自文化と異文化を比較できるように、日本国内の民芸品なども合わせて展示することとした。なお、展示資料は以下の四つ方法で収集した。

- (一) 生徒たちが自らの手で製作する。
 - (二) インターネットを通じて購入する。
 - (三) 生徒の家庭からも寄る。
 - (四) 国立民族学博物館から借りる。
- このようにして、一〇〇余点の展示資料を用意できた。

まずは会場づくりから

「ミニ博物館」づくりは、会場づくりから始まる。単に展示資料が分類整理さ

れていることや解説がわかりやすいだけではなく、来館者にとって居心地のよい空間であるように心がけたのである。清潔であること、照明が適切であること、また展示台の位置は来館者の視線を考慮した。このような視点は、教員が指導していないにもかかわらず、生徒たち自身が実践のなかで身につけていった。作業のなかではじめて「より気持ちよくよりわかりやすく」ということを考え、見せる側の苦勞を感じるようになった。それは、非常によい体験学習となったし、手づくり博物館成功の喜びをより大きなものとするようになった。

「ミニ博物館」開館

文化祭当日開館された「ミニ博物館」には、生徒と文化祭に訪れた保護者と教職員のもとすべてが来館し、熱心に視察してくれた。来館者は、展示資料一つひとつを手に取り、解説ラベルを読み、マルチメディア解説に見入っていた。生徒たちも当番を決めて解説者と来館者に一所懸命説明した。い



種類別・地域別に展示資料も分類され、完成した「ミニ博物館」



国立民族学博物館を訪れ、「もの広場」を調査する



生徒作品「舟司の木型」を中心とした中央展示台に見入る観覧者



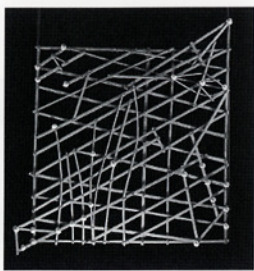
展示台の高さや配置位置を検討する



来館者に展示資料について解説する生徒

展示場は教材の宝庫

田尻 信壹 (たじりしんいち)
筑波大学附属高等学校教諭



マーシャル諸島の人がびとがココヤシの葉柄と貝殻でつくった教育用の海図

高校の現行の学習指導要領では、「博物館などの施設や地域の文化遺産についての関心を高め、文化財保護の重要性について理解させる」(日本史B)など、博物館の積極的な活用が提起されている。

民博のなかで、筆者が授業で活用したい展示品をピックアップしてみよう。

近代的工場制度の原型ともいわれる。しかし、その実態を具体的に説明するための有効な教材は少ない。ここでは、生徒が砂糖プランテーションについて学ぶことは難しい。アメリカ展示場のサトウキビの圧搾機は、生徒にプランテーションの過酷な労働の実態を伝えてくれる貴重な資料である。生徒は、この機械

オセアニア展示場の入り口に置かれていた枝編み海図は、生徒にとってインパクトのある資料である。世界史の授業が開始されてまもない四月にこれを生徒に見せ、「海で生活する人びとにとってとても大切なもの。何だと思うか」と尋ねる。これを導入にして、オセアニア展示場の精巧な擬餌鉤やさまざまな漁具を観察させることで、人類は農耕・牧畜以外にも、海洋などさまざまな環境に適応して優れた文化を育んできたことを生徒に気づかせたい。文化・文明の形成期の学習は、とくに抽象的な語句や概念で説明されがちである。そのことが生徒の世界史嫌い、世界史離れをもたらしている。世界史学習のオリエンテーションを兼ねるこの時期に、生徒の興味や好奇心を刺激する魅力的な教材を提供し、その心をしっかりとつかむ必要がある。枝編み海図などの展示品は、そんなニーズに応えることができるコンテンツといえる。

今日の世界史学習では、一七一一八世紀の大西洋世界は、近代世界の構造を理解する上で重要な地域となっている。カリブ海域に成立したアフリカ系奴隷労働にもとづく砂糖プランテーションは、大西洋世界の構造を象徴的に示すものである。砂糖プランテーションは農園と作業場(工場)がドッキングした施設で、

から奴隷たちが騒音と高温多湿の作業場で、昼も夜も過酷で危険な労働を強制された姿を想像することができるところ。

また、ビデオテークには、ゴレ島(セネガル)を取り上げた番組(「ゴレ島 奴隷の島から文化の島へ」)がある。この島には奴隷集積のための砦跡が保存さ

旅支度は民博で

柴田 元 (しばたはじめ) 大阪府立豊島高等学校教諭

学校の学習活動に民博を活用できないだろうか。二〇〇一年に開催された全米日系人博物館の巡回展「弁当からミックスプレートへ」多文化社会ハワイの日系アメリカ人」と特別展「ラッコとガラス玉―北太平洋の先住民交易―」にボランティア・スタップとして参加して以来、考え続けてきたことである。

二〇〇二年以降も時勢を視野に入れたメッセジ性豊かな特別展が続き、たいへん好評を博した。「ワウルスタイル」「マンダラ展」「世界大風呂敷展」「西アフリカおはなし村」「アイヌからのメッセジ」「多みんぞくニホ」在日外国人のくらし」「アラビアンナイト大博覧会」という、生徒の異文化学習や教員の教材研究に大いに役立つテーマ展示

が切れ目なく開催されたのだ。

いうまでもなく、常設展示も学習素材の宝庫である。展示場に足を踏み入れると、文字どおり、宝の山に分け入ったような感覚に襲われる。問題は教員がいかに関心をもち、展示物に接するかどうかである。その気になれば、すぐ手が届くところに貴重な宝の数々が眠っているのだ。

かくいう私も、勤務校のハワイ修学旅行の実施、当該学年の世界史Aの授業担当という偶然に恵まれなければ、民博活用はまだまだ机上のものに過ぎなかつたかも知れない。おまけに、二年生の必修世界史Aは、一九世紀末の「国民国家・帝国主義の成立」あたりから入る。アメリカによるハワイ併合の過程も

表紙モノ語り 仮面にこめられた願い

企画展「学校がみんなと出会った」出品作品/茨木市立葦原小学校4年生 作 縦/25cm~50cm 横/23cm~40cm

八代 健志
茨木市立葦原小学校教諭



儀礼、神事、芸能でもちいられたら、それ自体信仰の対象となったり、人びとをさまざまに思いをこめて仮面をつくってきた。民族学的な解釈はともかく、民博に展示されている数々の仮面にこめられた「思い」は、見学した子どもたちの心に強い喚起力をもった。そこで図工科の学習として、自分の願いをこめた仮面をつくることになった。表紙の面は、世界の仮面にインスピレーションを得て、子どもたちが製作した作品の一部である。

どんな願いがこめられているのか。中央右の面にこめられた願いは、「強くなれませう」。

作者の男の子は、悪者をやっつけるような強さのイメージをテレビアニメの「タイガーマスク」に託して、自発的にインターネットで情報収集し、製作した。

左下の女性の顔の面は、民博で見た韓国の影響を強く受けている。面にこめられた願いは「きょうだい仲よくケンカをしない」。製作したのは、日こ

生きできますように」など、四年生二〇名それぞれの願いがこめられている。これらの願いには「等身大の今の自分」が反映され、作品のれをしても、その子ならではの自分らしさが精一杯、表現されている。一つひとつの仮面が、個々の生命のさめぎに輝いて見えるのは、教え子に対する私の欲目だけではないだろう。保護者からも好評をよんだこの実践の成果を一人でも多くの人に広げたい。

れており、ユネスコ世界遺産に登録されている。この番組から、生徒は、一七一一八世紀の西アフリカとカリブ海域の関係を理解することが可能となるだろう。

博物館を積極的に活用したいと考えている筆者にとって、民博の展示品やビデオテークは、地歴科、とりわけ世界史にとって教材の宝庫である。



サトウキビの圧搾機

学習する。修学旅行向けの事前学習を通常の授業の流れに自然に乗せることができた。

二〇〇一年春、常設のオセアニア展示が模様替えされ「先住民の文化運動」のコーナーがあらたに設けられた。ハワイ先住民、マオリ、アボリジニの主権回復や文化復興の運動に関する展示が企画された。ハワイ先住民のコーナーには、経済的自立を図るため設立された「ハレ・クワイ」とよばれる生活協同組合の建物の実物が再現されている。店内には先住民のさまざまなメッセジがこめられた商品が並べられている。

昨年の夏、当該学年の希望生徒を民博へ引率した。「ハレ・クワイ」とオセアニア展示場を使ってワークシヨップをおこない、ワークシートを完成したり、ポリネシアについてのビデオテークを鑑賞したりした。二学期には、ハワイ先住民の歴史と主権回復運動を扱った「多民族社会ハワイの「光」と「影」」と題する自前の教材を作成し、旅行出発前に

特別授業をおこなった。

二〇〇四年度の府立高校の修学旅行の行き先は、海外では東南アジア、オセアニア、東アジアが多く、国内では沖縄、北海道が多い。民博活用を事前学習のなかに組み込んでみてはどうだろう。また民博を活用した教員のあいだで、成果や情報、意見などを交換する場をつくることも一案である。まずは民博へ足を運んでみることをおすすめしたい。



ハワイの生活協同組合の店「ハレ・クワイ」の内部